

黒正先生逝いて十年

三橋時雄

ともにせし学の道をわかつてとも

仰く高嶺の月一つなり

皆人はいかにさえけとはしきやし

たた一とすちに我か道を行く

針をもて巖根をうかつ心こそ

天地遠く道をひらかめ

この短歌三首はわたしの先生である黒正巖（こくしょうい
わを）博士が京都大学を退官される時に、わたしのお願
した色紙に書いて下さったものである。

黒正巖博士といつても、今の若い世代の間では知らない
人が殆どと思うが、戦前においては、京都市民の間でも、
その名は広く知られ、黒正先生といえば一般に非常な親し
みを以て迎えられ、敬愛されていた。それは黒正先生の先
生に当る本庄栄治郎先生と力を合わせて日本経済史の研究

を盛んにされた京大の著名教授としてだけでなく、その人
柄が陽気で磊落で、共に飲んで談ずる雰囲気を楽しまれた
人情味豊かな性格だったからであつて、赤みを帯びた福德
円満な温顔は接する者に春風駘蕩たる感じを与え、その熱
のこもつた講演と、次々に口をついて出る話題の豊富な座
談は、聴く者を魅了せずにはおかなかつた。したがつて祇
園町界隈でも人気があり、気前のよい教養ある遊び人とし
て黒正先生、黒正先生ともてはやされた。その先生が五十
五才の若さで忽然として逝かれたのが昭和二十四年九月三
日であるから、この九月でちょうどまる十年になる。十年
一昔というから、若い人たちが先生のことを知らないのも
無理はないが、わたしとしては、まことに淋しい感じがす
る。先生歿後十年を機に、京都あるいはもつと狭くわたし
自身との関係において先生を回想し、先生を紹介してみた

い気になったゆえんである。

先生は生粋の京都人ではなく、元來が岡山県人で、明治二十八年一月、上道郡可村大字多羅の布勢神社神官中山家に生まれ、六高時代に、見込まれて岡山市の富豪黒正家の養子となられた。京都に住まれるようになったのは、大正六年九月に、当時の京都帝国大学法科大学政治経済学科（大正八年六月に学制改革で京都帝国大学経済学部へ転学）に入學された時からで、途中海外留学や出張で二―三年は抜けるが、昭和十九年四月に母校第六高等学校の校長になられるまで約二十五年間を京都で過ごされ、初期は鹿ヶ谷桜木町あるいは浄土寺石橋町の御宅で、後には山科御陵の豪壮な邸宅で、その活動的な華々しい日々を送られたのである。その間になされた先生の仕事は数多く且つ偉大であるが、中でも学者としての最大の業績はその博士論文となった『百姓一揆の研究』（昭和三年、岩波書店）で、この輝かしい業績によって、「京都に黒正あり」と、その名は日本の学界のみならず広く世界に知られ、当時の京大農学部における花形教授であった。その意味において、この九月に先生の十周忌を記念して遺稿集『百姓一揆の研究、続篇』が京都のミネルヴァ書房から出版されたことは実に意義深いことであり、黒正巖博士の名は『百姓一揆の研究』と共に永く後の世まで残ることであろう。

黒正先生にわたしが初めてお会いしたのは、三高の弁論部が主催して先生の「中央集権と地方分権」というお話を伺った時である。先生は当時すでに『百姓一揆の研究』を一応完成されて日本経済史や経済地理学の体系を樹てられていた頃で、羽織袴に白足袋という颯爽たる姿で早口の雄弁を振られた。時恰かも昭和の農村不況期で、農村問題に興味を持ち始めていた田舎者のわたしは、この話をきいて、「中央都市文化の華々しさの下に埋もれている地方文化発展のため少しでも役立ちたい」という決意を固めたのであった。わたしが三高の文乙から京大の農学部へ進学することになったのも、橋本伝左衛門先生等と並んで黒正先生の影響力が大であったといつてよい。

農学部へ入ってからのわたしは、先生の経済史や農史の講義をきくとともに、農史演習（ゼミナール）にも参加し、大学生活の喜びを味わせてもらった。講義や演習が先生の都合で休みになることも度々あったが、その埋め合わせに夜、石橋町のお宅へ伺って、コーヒートを頂きながらゲルデスのドイツ農民史を皆で一緒に講読したりしたこともある。この本読みが終って、後期の演習では、夏休み中にわたしたち学生の調べて来たことを、当時先生が私財を投じて創立された日本経済史研究所（現在京都大学農学部附属農業簿記研究施設になっている建物で、農学部の南隣りにあった）の

講演室で報告し合つた。学生の報告に対して先生がこつぴどく批判されるということは余りなかつたが、この演習は少なくともわたしにとつては楽しいものであつたし、皆にとつてもハイキングがてら他所へ行つておこなう演習はやはり楽しかつたようである。洛西の三鈿寺や比叡山などへ泊りがけで行き、そこで幾つもの報告をきいたあと、般若湯でクラスコンパをしたことも、わたしが研究室へ残つてからは何度かあつた。こういう一般普通とは異なつた演習のやり方の中にも、しかつめらしい形式にとらわれない、いわゆる教育者くさくない教育者としての先生の一面が見られるのである。

もつとも、このように他所へ行つて演習をされたのは、時間の不足を補うためであつたが、しかし、それ以外に先生自身ハイキングや旅行が好きだつたことにもよるのであろう。そしてこのようなハイキングでも、先生はいつも愛用のステッキを振りながら、わたし達の先頭を切つて堂々と歩かれた。人生行路においてもそうだつたのであるが、先生はこのように人の先になつて歩く方が楽だからだと言われていた。それにしても先生の健脚は大したもので、若い者たちの先頭を切られるだけの實力は充分あつた。これは先生の生家が山の中腹にあつて、幼少の頃から坂道を日に何回も上り下りされたこと、中学、高等学校時代にも往

復四里ほどの道を毎日徒歩通学されたことのお蔭であつて、歩きながら滔々と天下国家を論ずる余裕を持つておられた。

ハイキングでは方々へ行かれたが、わたし達の場合は向日町から三鈿寺への道がレギュラーコースで、大枝村あたりの竹藪の中を通り抜けた時の風景は今なおわたしの記憶に新しい。そのほか鷹ヶ峰方面とか嵯峨、鞍馬、東山など先生は好んで京都の郊外を皆と一緒によく歩かれた。わたし達若い者にとつては、歩いた後の飲み食いが楽しみであつたが、それにも増して楽しかつたのは、そのような飲み食いの席における先生の座談であつて、これには一同喜んで耳を傾けたものである。学生のコンパ以外で先生の御馳走になつたのは、山科の御宅での場合が多かつたが、浜作やギルビーで御馳走になることも珍しくなかつた。一力や角屋を見学させてもらへたのも全く先生のお蔭である。

先生としては研究や教育以外にも随分といろいろのことをやられ、いわゆる研究者らしくない研究者、あるいは教育者らしからぬ教育者として、種々批判もされたようであるが、やはり若い者達とこのようにして色々と話している時が一番楽しかつたのではないかと思われる。それだけに、昭和二十四年に京都大学の教授を退官されることになつて、五月二十一日に退官記念特別講義をされた時の先生の気持には、全く感慨無量のものであつたようである。その日わ

たしのお願ひした色紙に感慨深げに書いて下さったのが最初に掲げた三首の短歌である。

わたしとしては、この歌にあるように、先生がこれまでわたし達と共にして来られた学びの道を別たれても、仰ぐ高嶺の月は一つなのであるから、その同じ月をめざして、誰が何と言おうと、ただ一筋に先生の道を力強く進んで下さることに大きな期待を持っていたのであるが、その後わずか三月にして五十五才の若さで突如逝つてしまわれた。かえすがえすも残念である。あれから十年。わたし自身はあとに残された「針をもて」の歌をわたしにたいする教訓として、ややもすれば岩の堅さに打ちくじけそうになる我が心を励ましながら、今なおコツコツと針で岩をうがつ作業を根気よく続けている。いつかは先生の御恩に報いうる日の来ることを信じつつ。したがって今のわたしには、まだ先生の歌にお答えするだけの力もなければ資格もない。そこで今はただ先生の二つの歌を組み合わせ、それを以てわたしの覚悟をもう一度新たにしたいと思う。

針をもて巖根をうがつ心して

ただ一とすじに我が道を行く

(昭和三十四年十一月、「おろかおい」所載)

(みつはし ときお・平成八年二月没)

—故三橋時雄京都大学名誉教授に、黒正巖博士の思い出をとお願ひしたところ、快諾して頂いた。しかし、三橋先生は一九九五五年の年末より病床に臥され、新しい原稿は書けないので先生の随筆集である「おろかおい」から抜粋してほしい旨、申し出られた。そして一九九六年二月二九日、御逝去された。ここに、本稿の経過を報告するとともに、先生の御冥福を心よりお祈り致します。(編集委員会・注)